

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

北海道



日本作文の会編

日本の 子どもの詩

北海道

岩崎書店

日本文作の会
日本の子どもの詩 1
岩崎書店 昭55
110 p 21cm
内容：1 北海道
〔分〕911

日本の子どもの詩 1 北海道

一九八〇年一〇月二五日 初版発行

編者 日本文作の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話(〇三)八二二・九三二(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ゼンたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもたちの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときときによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などもよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの『わらべうた』）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「北海道編」であります。どうぞ、ひとつひとつしずかにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

8

くさ

かぜ

夕方の川の水

おにごっこ

鳥

9

月夜

ぶらんこ

さびしい晩

10

野原

体操

みか月

11

父の眼鏡

ふぶき

寒い風

大根洗い

12

ノリトリ

自転車

一銭店

13

暮れ

14

馬車追い

鮫釣り

15

おかあさん

16

どろをとる舟

稻かけ

あかり

17

でんとこんかり

母

18

木工場の汽笛

皮靴

晩

19

サイハイマゴロキタ

船の歌

20

波

夜

21

みまい

髪刈り

22

父

死んだとうちゃん

父のはたらき

23

私の手

24

畑おこし

ひえぬき

採種たて

25

兄の試験は明日だ

26

べんとう
雨漏り



1945
~
1959

28

ねこやなぎ
とこや

29

かみしばい
春のにおい
はるのし

30

さくらんぼ
かお

31

炭つみ
おとうさん

32

まっくろな川
牛のふんだし

33

とうさん
夜のジーゼルカー
うま

34

ぼくそう

35

函つくり
働く人

36

ちちしほり
つぶとり

37

しょうじょう
わらたたき
くも

38

むかしばなし

39

ころし大会

にしん

40

足

41

いかつけ

42

ゆきふり

43

たんぐつ

44

手

45

ゆきなげ

46

はつ雪

47

ぶた

48

けむりのくも

49

炭鉱に行く父

50

夜あけ



1960
~
1969

46

春

ベトナムのせんそう

開たくのころ

47

まきわりするおとうさん

- 48 私はおばさん
にしがとれた
49 選挙
50 農業には学問はいらない
勉強すれば怒る父
51 ベトナム少年の死
52 抵抗
53 航空母艦の求めているもの
ひとつっこ
あめふり
54 雪
先生のぼうぼうなひげ
すずめ
55 今の生徒
学級のなかに差別があった
56 よう接工場
子どものくせに
57 夏の朝
農民
58 もうすぐでんきだ
はし
59 くつ音
60 先生
いか
61 とうさん
つぶれた穴戸

- 62 ヘッドライト
先生 みいこのおねがいきいてね
63 ゆき
ゆきみち
64 おつゆ
ゆき
65 新しいくつ
おじいちゃん
66 海で働く男たち
いかのし
67 指
でんぶんはこび
68 青函連絡船
1970
～
1979
子牛のぬねこ
70 春がきたら
伊香牛の春
71 かたつむりのかんさつ
72 せんせいので
おかあさん
73 先生
おかしな かお



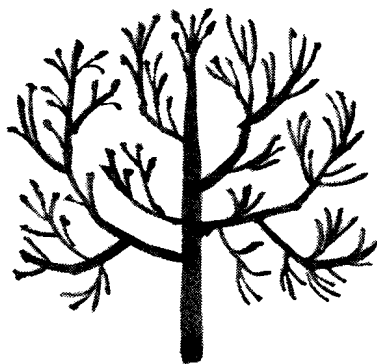
74	かあさん
75	ビート植え
76	とうさんと北洋独航船
77	もみまき
78	あしぬき
79	あめんぼ
80	むし
81	こんぶひろい
82	父
83	はとぶえ
84	豊姫が売られる
85	ひどい言い方
86	水俣病
87	おとなになること
88	ベトナムのダーちゃん
89	弟
90	ペス
91	祖母
92	なわとび
93	あらし
94	さかあがり
95	先生おこるな
96	秋の風
97	母の仕事
98	牛のちち
99	じいちゃん

91	こんぶ
92	父
93	いまはいかつりだ
94	バカなやつ
95	かんじ
96	きゅうしよく
97	ペンダントのロケット
98	出かせぎ
99	のおおくん
100	おとうさんのたいいん
101	かあさんしゃっこい
102	おとうさんのひざ
103	うえのくん
104	まちの雪
105	空気をとじこめたつらら
106	スキー―手宮富士からすべておちた
107	父
108	せいっぱいの力
109	地下たび
110	冬のふろ
111	お母さんの手
112	かたたたき
113	母はまた働きに行った
114	朝の牛乳出し
115	馬場君

あとがき——北海道の児童詩指導の歩み
この本の編集をした人たち

*





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

ここには、
北海道の子どもたちのこんな詩
がある。

* 詩を書きはじめたころ。

* 詩を書くことがさかんになった
ころ。

* 生活をよく見つけて書くように
なったころ。

北海道の子どもが書いた、この
ころのたくさんさんの詩からこの時代
のことがよくわかる詩をえらんで
のせてある。

くさ

山口英一 小4

くさがうごいている。

はなしでもしているのか、

なんのはなしだろう。

有珠郡壮瞥校

かぜ

大野壯平 小4

あれあれ、はたけの上を、

あかやあおのかぜが、

はしっているようだ。

有珠郡壮瞥校

夕方の川の水

宮下敏夫 小5

夕方、しんとなった川、

水、草色になっている。

そこに夕日がかば色にさした。

橋のかげもゆれている。

はつどうきが一そう

水をはげしくきつて下っていった。

釧路市旭校(指導)坂本亮

おにぎり

笠島敏夫 小3

おにごっこして、

舟のかげにかくれたら、

いわしのおいがしたよ。

亀田郡石崎校

鳥

福澤せつ 小5

鳥が三羽

列をつくって飛んで行った。

男の人が、

ばけつを持ちながら、
口をあいて見ている。
ばけつの水を
鳥が一羽ずつ通った。

亀田郡石崎校(指導)木村不二男

月夜

月夜に町を通りました。

軒下で猫が二匹、

鼻と鼻をつきあわせて、

うなり合っていました。

猫のひげが、

月に照らされて、

白く光ってました。

亀田郡石崎校(指導)木村不二男



倉部 すす 小5

ぶらんこ

松代守藏 小5

あかしやのいいにおいだ。

風といっしょに流れてくる。

ぶらんこに、

子供が二人乗ってる。

どちらも空を見ている。

あかしやの葉が、

一まい散った。

二まい散った。

三まい散った。

亀田郡石崎校(指導)木村不二男

さびしい晩

石垣のぶ子 小5

夕方の波の音のする窓で

姉さんが本を読んでいる。

くもった空だ。

桜の花が、

今晚あたり咲きそうだよ。

亀田郡石崎校(指導)木村不二男

野原

太陽が白い。

どこかで鶏がないてる。

草の上に身をよせた。

あつい葉のにおいをするようだよ。

白い空の中、

梢も光って新しい。

ああ、すこしばかりの風で、

ほうぼうの草たちさわいでいる。

向こうで草をむしっている牛、

つよう一度うなった。

函館女子高等学校(指導)海老名礼太



体操

森好志枝 小4

先生の廻れ右の号令、

まわりきって体がすんとなる。

運動場の屋根から、

どうと雪が落ちたよ。

午すぎのあかるい日ざしが、

窓から一ぱい流れている運動場。

「駄足」の号令で

私は股を高く上げようとしている。

釧路市第四校(指導)坂本亮

みか月

黒田とき 小5

「あ、三日月さんが立っておいでる。」

米が高くなるのだ。

母さん、にっこりした。

札幌第三校(指導)丹後勲

父の眼鏡^{めがね}

本市藤男 小6

父は目がわるいという。

僕は父がどんなにわるいかと思っている。

できるなら眼鏡をかけさせたい。

僕は烏賊^{いか}つけに行っている。

烏賊つけた金で、

五六十銭するなら買ってやりたい。

瀬棚郡瀬棚校(指導)吉田緑郎

ふぶき

畠山ひさ子 小2

天きの日は

ぴか　ぴか　光る　雪。

ふぶく　ときは

くらく　なる　雪。

上川郡旭川校(指導)土橋明次

寒い風

小合芳子 小4

寒い晩

かさをかぶった月のそばを

うすい雲

灰色に光って通った。

駅で

きかんしゃのいれかえをしている。

釧路市旭校(指導)坂本亮

大根洗い

斎藤ツマ 小2

ごしごし大根洗っている。

大根はつぎつぎとはこばれて、

お母さんに洗われてまっしろになる。

納屋^{なや}の下^{した}の男の人が、

まぶしそうな顔をして、

汗をふきふき、

「二千五百だ、もういいだろう」といった。

小犬が大根にとびついてじやれていた。

夕飯の仕度^{しだく}だろうか、

鯿^{にしん}をやくにおいがした。

日がまっかに窓を目がけてさしている。

隣のけいちゃん^{となり}が泣いている。

余市郡余市校(指導)高島幸次

ノリトリ

デムラカツミ 小1

オトウサント

ノリトリニツツ^(築港)コウマデイツタ。

ツツコウノガンケ^(石垣)ヲワタツテイツタ。

オトウサンハ「ユキ、フカイナ」トイツタ。

ボクハ「ナンデモナイ」トイツタ。

ザルヲガンケニアテテ、

ササラデノリヲ^(ハギトツツ)ハイトツタ。

松山郡江差町茂尻校

自転車

斉藤治子 小6

ぱんぱん乾いた道

自転車にのって遊んだ。

どこか遠くまで行ってみたくなった。

「母さん、お使いな〜い。」

「北口さんへこれ持って

いってころばないようにね。」

「うん。」

「すーっ」と気持よく走る自転車

前輪の泥よけに

太陽の光がはじけている。

旭川師範附属校(指導)小坂佐久馬

一銭店

柏崎義一 小5

夕方うまい肉で御飯をたべている。

六時の汽笛^{きてき}がぼうとなる。

父さんこまったような顔して

「今日取りまえがあまりない」と静かな声で言った。

「こまったな。」と母さんも考えている。

「御飯」と僕が言っても、

だまって考えこんでいる母だ。

「義一に一銭店やらせるか。」と父がいった。

僕はうんやろと思った。

「義一、春が早く来れば一つ金でももうけてやれ。」

と父も笑ったし、母も少し笑った。

釧路市旭校指導坂本亮

暮れ

金沢静江 高2

学校から帰ると、

ぼそぼそとしめつばい話声が聞えてくる。

誰だろう。……

お客様の横に黒く光って、カバンがあった。

「浜の人たちは烏賊釣^{いかづき}れていいが、どうかこ

れだけでがまんして下さい」

父が札二枚置いた。

ああ、そうだ、函館^{はこだて}の店員さんだ。

「半分位は貰^{もら}えると思^{おも}ってきたんだがなあ」

店員はいやな顔をして札を見ている。

私もだまって店員を見た。

母は煤^{すす}けた天井を見つめていた。

父が決心したようにキツとして

「明日の昼頃まで金くめんします」

何度も頭を下げた。

店員はだまって札をしまつて出て行った。

店員が出て行った後、

父と母とが顔を見合せて、ほっとしている。

私は父と母の顔を見るのがつらかった。

家のことを考えると悲しくなった。

襖^{かすま}の絵紙がぼうつと かすんで見える。

私は 握^{にぎ}り拳^{こぶし}に力を入れた。

奥尻郡釣石校(指導)阿部秀一



馬車追い

橋谷金四郎 高2

馬車の音ガタガタ
凍った土になる
馬車の荷物ぐらぐらゆれる
薪積んでいる
朝からたのまれたんだ
馬は重そうに引張ってふんばる
寒い朝だ
馬も俺もまだ飯食っていない
馬の息何処までも伸びる
おれ手綱を取って歩いて行く
水際に来た
馬車が薄い氷を破って
ガタン、ピシャン
ひっくり返りそうだ
馬の脚肉の山のように
馬の毛凍ってた
もう少しだ

14

「飯うんとかせるぞ」

奥尻郡釣石校(指導)阿部秀一

鮫釣り

満島喜代治 高2

父と僕と二人、鮫釣りに行く。
海は凪だ。
鍋釣岩の上に海苔の影が黒く見える。
舟は静かに下りた。
手伝いにきた母は
「今、風、出てくるぞ」と言ってくれた。
僕と父は櫓をこぐ。
しばらくぶりで沖へ行く。
浜の方に黒く母の影が見える。
あたたかい日が背中でおどる。
緑色の波の上に、
ボンテンがゆらゆら浮いている。
この二三日ですっかり変わった標旗、
ボンテンに船をつけて縄を上げる。
縄は海草のためにベラベラしている。